



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第
8号)

AUTHOR(S):

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第8号). 泌尿器科紀要 1961, 7(8): 820-820

ISSUE DATE:

1961-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112173>

RIGHT:

編集後記

メディカルカルチュア2巻4号の「天国の階段から」—医者への疑問—を読んでかなりのショックを受けた。これは村松喬氏（作家）が亡父梢風氏の靈魂に為り代つた形でその発病から死に至る間の医師や病院に対する不満を書き表わしたものである。その中から要点を抜き出してみよう。

医者は万能ではないのだから必然的に謙虚でなければならぬ。病人やその家族は医者に対して弱点を持っている。医者を先生とうやまうのは病気をなおしたいからである。患者や家族のそのような態度に医者がなれてそれを当然の事と思つては困る。某大学病院へ入院したが多くの医師は危険な容態を意に介していないのか、或は全然わからなかつたか、どちらかである。医学と物理や化学との関係よりも医学と宗教や哲学との関係の方が密接なのではないか。現在の医者が医者と生命と死という事を充分認識しているか。死後にニュース記者と医者との間にやや困難な事態が起きたが、それは病名がはつきりしていないためであつた。家族の悲しみの中に極めて事務的な事態が次々と起つた。先ず葬儀屋との折衝。次に病院では死体を解剖に付したいと申し出た。家族は同意を与えた。然し弔問客等の都合で解剖を少し延ばしたいと思つたが、今度は病院側は矢の催促である。ここに至ると主客転倒の觀を呈した。解剖室では裸のまま長くはつて置かれた。死体に対する侮辱とも取れる。解剖の結果は肺の真菌症との事であつたが、主治医はその病気をよく知らなかつた。あとで詳しく知らせるとの事であつたが、そのままである。肉体を研究資料に提供したのであるが、その扱い方は完べきではなかつた。但し医者の全てがこのようではない。又、医者以外の原因、例えば現代世相が医者を斯くの如くしているとも考えられる。

大体以上のようなものである。勿論、こんな事ばかりではないし、村松氏の思いがけいもあるかも知れぬ。然しこのような事もないとは云えないので自戒を要する。更にこの文章の次に小島政二郎氏の読後感が載っているが、それも医者にとつて痛いものである。然しそんなのばかりではない。中央公論8月号の遠藤周作氏の「療養者に与うるの記」にては医師に対する信頼が記されている（昭和36年8月）



購読要項

1. 発行は毎月（年12回）とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金 100円、払込みは振替口座番号京都4772番 泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名（フリガナ）、住所（雑誌郵送先）、勤務先、職地位、自宅開業の別、送金方法を御記入の上編集部宛。

投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他。寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。
例。中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 : 527, 1941.
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を附け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は申受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁 600円、それ以上の頁、アート頁、図表、写真は実費を申受ける。別冊20部を無料贈呈、それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は初校のみ著者校正とし、再校以降は編集部が行う。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院 京都大学病院 泌尿器科紀要編集部。